八王子の学生が地域おこしをお助け
「プロジェクトYターン」
拓殖大学　徳永研究室ゼミナール

徳永ゼミは11人中6人が八王子市在住。「八王子が地域おこしの拠点です」

都市部への人口や産業の集中からの脱却を図る「地方創生」が叫ばれるなか、全国各地で地域おこしの取り組みが活発に行われています。八王子市高尾にある拓殖大学国際学部の徳永研究室ゼミナールによる「プロジェクトYターン」もそのひとつ。山梨県富士川町の空き家を学生たちが管理。学生課外活動などを行うことで過疎の町に活気を取り戻すというのが取り組みの柱です。

「学生に地域おこしの『現場』を提供し、地方の臨場感を伝えたい」とは、この取り組みを指導する同大学の徳永達己教授です。徳永教授はインフラ開発分野の国際協力に長く携わり、都市や地域の開発の現場を見てきた経験から、八王子に地域おこしの可能性を見出しました。

指導に当たる徳永達己教授

「八王子は11万人の学生が学ぶ学園都市です。若い力を地域創生に振り向けられるのはこの町が持っている大きなポテンシャルです。将来的に学生を束ねて、八王子を地域おこし拠点にしたいと思っています」

昨年から行われている「プロジェクトYターン」ですが着実に成果が上がっています。

「学生たちが空き家のくもの巣を払い、掃除をする。入居者がなくても、資産価値が上がります。八王子から富士川町までは2時間ほどですから定期的に通うことができる。町に若者の声が増えるにしたがって、活性化への効果が少しずつ表れてくるというものです」

また国際教育に力を入れる同大学だからこそできる取り組みもあります。

「本学は10人に1人が留学生。整備した空き家を留学生のホームステイや国際交流の場とするのです。そうすることで富士川町の名がSNSなどで全世界に拡散されていくわけです」

2年目となる今年度は「地方創生の新しいカタチづくり」をテーマに、地方創生と国際交流をよりリンクさせ8月には富士川町に韓国から大学生を招くなど、さらに活発に活動を行っています。

今年度の取り組みの学生責任者である安藤智博さんは「自分自身、地方出身で都会への憧れがありましたが、この取り組みに参加して、都会は良くて、地方がダメだと単純化できないと感じた。地方創生や国際交流はすぐに結果が出ない。これから長く続けていくためにも、しっかりと土台を築いていきたいです」とやる気をみなぎらせます。